

〈書評〉

『フェミニン・エンディングー音楽・ジェンダー・セクシュアリティ』

スーザン・マクレアリ著、女性と音楽研究フォーラム訳、東京・新水社、1997、334頁

辻 浩 美

本書は、MaClary, Susan, *Feminine Endings: Music, Gender, and Sexuality* (Minnesota: University of Minnesota Press, 1991, p.220) の全訳である。1987年から1989年の間に書かれた評論を収集したもので、音楽の分野にフェミニズム批評という音楽学の新しい視点を組み入れた出発点として、1991年に刊行されて以来、男性研究者も含めて北米の音楽学会に大きな波紋を投げかけた。翻訳は日本語版が初めてであるが、この日本語版への序（『フェミニン・エンディング』をふりかえって）では、マクレアリ自身が、出版当時から現在に至るまでの本書の評価やフェミニズム批評をめぐるアメリカ音楽学会の動向を、整然と語っている。

著者スーザン・マクレアリは1946年に生まれ、通常の音楽学を学び、1976年にハーヴァード大学において「モンテヴェルディの作品研究」で博士号を取得後、ミネソタ大学（1977～）、マクギアル大学（1991～）で教鞭をとり、現在カリフォルニア大学ロサンゼルス校の音楽学教授の職にある。1995年には芸術、学問、社会貢献に多大な成果を上げた者に授与されるマッカーサー基金を受賞した。彼女の研究領域は17世紀の音楽様式、バッハの音楽に潜むイデオロギー性、現代音楽の受容、ポピュラー音楽、そしてフェミニズム批評と幅広い。当初は普通の音楽学を学んできたマクレアリであったが、次第に立入禁止の領域、即ち音楽の意味を問う事柄に足を踏み入れることになる。

ところで、本書のタイトル『フェミニン・エンディング』は音楽用語の「女性終止」を指すが、これは強拍で終わる正規の終止、普通の終止である「男性終止」に対する語として、弱拍で終わる通常でない終止、過剰で逸脱したドミナントの響きで弱められた終止を意味する（譜例1、譜例2）。最初にこの概念を導入したのは、ベルギーの作曲家 J・J・ド・モミニ（1762-1842）であるが、音楽理論の用語でさえ「音楽外」の意味が侵入し、ジェンダーの政治性が絡んでいることを暗示させる卓越した表題である。加えて、「フェミニン・エンディング」の訳語は、単に音楽用語としてだけでなく、最終的には、「女性の声で閉じること、女性が終わりを決めること」、つまり自らのアイデンティティを確立して音楽を創造し、真の意味での女性終止を形成するといった意味

譜例1 男性終止(a)と女性終止(b)

譜例2 女性終止の曲例

a 男性終止

b 女性終止

(強拍に終わる)

(弱拍に終わる)

バッハ：ポロネーズ(〈フランス組曲〉第6番より)



* S D — T S D T

S D — T

(渡鏡子「終止法」『音楽大事典』3 東京:平凡社、1982)

*T(=トニック)は主和音を、D(=ドミナント)は属和音を、S(=サブドミナント)は下属和音を表わす。S→D→Tの進行は終止形の中でも最もポピュラーな形であるが、Tを強拍に置くことで一層安定感が得られる。

も含んでいる点で、一層興味深い。

従来の音楽学では、音楽は音楽以外のものを意味しないとする「自律芸術」や「構造主義」の名の下で考察され、記されたテキストである「楽譜」を唯一の、しかも最良の手がかりとして分析してきた。また、その研究対象も西洋クラシック音楽を良しとする傾向が強かった。マクレアリはこの偏狹的な姿勢に対して真っ向から立ち向かい、音楽を音の構造物として捉えるだけでなく、そこに内在する社会的な性差としてのジェンダーやセクシュアリティを解明し、同時に音楽の社会的・文化的な意味付けを行なっている。そして、この新しい方法論が音楽一般に通用すると確信し、考察の対象を通常のクラシック音楽だけでなく、ポストモダンのパフォーマンス・アートやポピュラー音楽まで広げ、哲学、社会学、文化人類学等の広範な知識を駆使して、そこに眠っている肉声を呼び起こそうとしている。

本書の構成は、前半は一般に名曲とされている作品 — モンテヴェルディの《オルフェオ》、ビゼーの《カルメン》、チャイコフスキーの交響曲第4番等 — を採り上げ、ジェンダーの記号学や作品に見るジェンダーと階級との関係やジェンダー表現と物語的慣習の研究がなされている。次にシリアスな作品として、現代アメリカの女性作曲家ジャニカ・ヴァンダヴェルドの《ジェネシスⅡ》を題材に、従来の男性上位主義的な技法の孕む問題点について、女性の肉声による顕在化を図っている。最後の2章では、ポスト・モダンのパフォーマンス・アーティスト、ローリー・アンダーソンやダイヤモンド・ギャラス、そしてポップス界の女王マドンナを対象に、女性の身体をめぐる問題を提示している。殊にマドンナの分析では、テキストの内容や音楽的表現といった単純な視点からではなく、視覚的要素と音楽を絡めて、実は父権社会への皮肉を込めたマドンナ自身による戦略である、と切り込む。このように、マクレアリは歴史的、ジャンルの枠組を越えた広範な音楽を対象に置き、従来の構造理論に基づく作品分析に対して、「女と男の間に働く不可視の権力関係を暴くことによって読み替えていく」(井上：1997)という技法を示したことによって、音楽学の研究領域の幅を格段に広げたのである。

フェミニズムを視点に入れた音楽研究は、文学、美術、映画、パフォーマンスと比較すると、立ち遅れている状態にある。というのも、文学は言語表現によって、美術は視覚表現によって、そして映画・演劇は言語・視覚表現によって、具体的にジェンダーを表象できるのに対し、音楽はその特殊性、即ち抽象的な音の調べによって、具体的にそれを語ることはできないからである。しかし、マクレアリはオペラにも器楽曲にも浸透している物語構成の標準的図式が、ジェンダーや権力の点でいかに偏っているか、という問題を次々と解明していく。中でも歌詞もストーリーも持たない、西洋クラシック音楽の神髄である「純粋器楽曲」の分析は実に明解だ。ここでは、19世紀の「絶対音楽」の代表的な様式の1つである、交響曲の第1楽章を例にとって見てみよう。

18、19世紀は交響曲というジャンルが量産された時代であるが、その第1楽章の殆どは2項対立の図式に則ったソナタ形式を採用している。この図式の主眼となるものは2つの調性間の対決であり、通常それは2つの対照的な主題によって奏でられる。第1主題（主調を確立し、この楽章の主役を演じる。攻撃的で男性的性格）と相反する第2主題（新たな調性を確立し、準主役を演じる。叙情的で女性的性格）が敵対関係を保ちながら、物語を展開させ（主題操作、絶え間ない転調）、最後は第1主題が第2主題を主調に押し込め、解決に導く。つまり、第1主題は自分の調のアイデンティティを脅かす存在であった第2主題を、制圧し同化することで、めでたく調べを終結させるのである。その他、形式以外でも、不協和音や短3度の響き、短調の設定が女性の不安定な感情を、更には狂気を表現するという説を始め、マクレアリはジェンダーの刻印がはっきりと押された曲例を引用しながら、彼女の論法を鮮やかに展開させていく。

さて、日本では本書をどう受け止めるであろうか。これまで、「女性と音楽」の関係を論じた日本語による文献は幾つかあるが、史実を忠実に伝える目的で書かれたもので、その内容は紹介的な意味合いが強く、啓蒙的域に留まっている¹。従って、音楽作品の内面にまで立ち入り、その意味を言及することを目的に置くものは、未だかつて無かった。尤も、最近になってようやく音楽学会の中で話題に上るようになってきたとは言えるものの、日本は欧米とは比較にならないほど、「音楽とジェンダー論」への関心が薄いのも事実である。こうした状況に

あって、本書の翻訳に携わった「女性と音楽研究フォーラム」の活動は特筆されよう。「女性と音楽研究フォーラム」は、「女性と音楽」への関心を共通項に置き、演奏家、教員、団体役員、図書館員、学生等さまざまな形で音楽に携わるメンバーから成る研究グループである。1993年に発足して以来、先進的なフェミニズム音楽学の紹介と普及、女性作曲家の発掘、男性優位による従来の音楽史全体の見直しを図り、研究会やCDレクチャー・コンサートを重ね、更に「女性作曲家の存在を知り、聴くコンサート」(1994)、「エイミー・ビーチの個展」(1996)、「回顧 ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル」(1998)のコンサートの企画・主宰を実現させるなど、その活動の場を徐々に広げている。

本書のマクレアリによる分析は、時として強引とも取れ、納得し難いケースも幾つか見受けられることは確かだ。この点については、彼女自身、日本語版への序の中で十分認めた上で、日本にも「音楽学者の新たな共同体の中で、ジェンダー表象と音楽解釈の諸問題をめぐる論争が引き起こされる」ことを期待している。その性格の差こそあれ、北米の音楽学会と同様、保守的傾向の強い日本の音楽学会にとっても、マクレアリによる過剰なほどの問題提起は、現状打開に向けての何らかの突破口となり得るだろう。これまでタブー視されてきた「音楽の意味を問う」という全く新しい方法論が、現在の日本の音楽学の在り方を問い直し、研究領域の幅を広げ、音楽学の新たな可能性を見出す契機となる日が来ることを、私は信じたい。

(お茶の水女子大学人間文化研究科博士課程)

注

1. 日本語による文献例

ソフィー・ドリンカー著 水垣玲子訳『音楽と女性の歴史』東京：学藝書林、1996年。[*Drinker, Sophie, Music and Women : The Story of Women in their Relation to Music.* (New York : Coward-MaCann, 1948)]

エヴァ・リーガー著 石井栄子他訳『音楽史の中の女たち——なぜ女流作曲家は生れなかったか』東京：思索社、1985年。[*Rieger, Eva, Frau, Musik und Männerherrschaft; zum Ausschluss der Frau aus der deutschen Musikpädagogik, Musikwissenschaft und Musikausbildung.* (Frankfurt : Ullstein, 1981)]

エヴリス・ピエイエ著 金子美都子・川竹英克訳『女流音楽家の誕生』東京：春秋社、1995年。[*Pieiller, Evelyne, Musique Maestra.* (Paris : Editions Plume, 1992)]

八木裕子編『女性と音楽』民族音楽双書2 東京：東京書籍、1990年。

参考文献

井上貴子 「ジェンダーと音楽学 —— 問題点と可能性」『東洋音楽研究』62, 1997年。pp. 21-38.